

新岡垣風土記

第459回

町の県指定文化財の紹介②

—海蔵寺の木造馬頭観音坐像—

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

海蔵寺（内浦）の宗派は、臨濟宗大徳寺派である。本尊（寺の本堂などで安置されている仏像）は、馬頭観世音菩薩である。「観世音」は、「観音」と呼ばれることもある。昭和38（1963）年、この仏像が「木造馬頭観音坐像」として、県指定文化財に指定された。

海蔵寺は鎌倉時代の末期（1300年頃）、大暁禪師和尚によって開基（創設）されたという。彼のことは後でもふれる。

その後、廃れて、室町時代の永享12（1440）年に再興された。この時の施主は、須藤駿河守行重である。彼は、前回紹介した高倉神社の銅造毘沙門天立像築造の願主だった。

それまでの本尊も馬頭観世音菩薩だったが、火災で焼けていた。

海蔵寺再興とともに、本尊を造ることになった。取り次ぎを行ったのは、博多商人の宗金四郎

だったという。宗は京都の仏師に注文した。仏像の像高は約62センチメートルの坐像である。その体内に銘文が残され、嘉吉元（1441）年に、京都三条の仏所（仏像などを造る工房）で、仏師の祐尊によって造られたという。

仏像の種類が多いことは、前回にふれた。馬頭観音は「菩薩」に属している。菩薩の中の1つが観音菩薩といい、これも7つに分かれている。その1つが馬頭観音（菩薩をつけることもある）といい、頭の上に「馬頭」をつけているので、馬頭観音といわれている。

馬頭観音像は像によって、顔の数と手の数が違う。海蔵寺の像は、3面6臂（3つの顔と6本の手）である。

顔は3面（正面と左右）あって、正面の顔には額にも目があり、3眼となっている。正面の顔は炎のような髪を逆立て、牙をむき出し、

口を結んで、憤怒の表情をしている。左右の顔も、憤怒の表情で口を結んでいる。

手は6臂（6本）あって、胸前の手は両手を合わせ、人差し指と薬指を中側に折り込んでいる。

上方にあげた左手には宝棒を持ち、右手には斧を持っている。下方の左手には数珠を持ち、右手は「施無畏印」を結んでいる。「施無畏印」とは、衆生（命あるもの）の畏れを去らせることだという。

右膝を立てて坐しているのが、坐像だという。

像は木造で、松材を使用した「寄木造」（2つ以上の材を組み合わせて像の主要部を造る技法）だといわれている。

かつては、この木造馬頭観音坐像は秘仏だといって、50年に1回の開帳（特定の日に、秘仏を拝ん



▲海蔵寺の木造馬頭観音坐像（「岡垣町史」から援用）



▲頭部の拡大写真

でもらう）だった。一生に1回拝めたらしいともいわれた。今では、毎年2月28日に開帳されている。檀家だけでなく、一般客でも拝むことができる。

海蔵寺には、「紙本著色大暁禪師像」（画像）も保管されている。大暁禪師のことは前記したように、開基時の和尚である。画像は、彼の肖像画という。ただ、描かれたのは、江戸時代の天明2（1782）年となっている。

この画像は昭和53（1978）年、町指定文化財とされた。

著色は「ちやくしよく」と読む。これまで永い間、国や県、市町村指定の文化財で、色絵で描かれた肖像画等は着色でなく、著色とされてきた。

【参考文献】

- 「岡垣町史」
- 「岡垣町の仏像」（八尋和泉執筆）